

Vol.33 2022年 9月 発行

NPO 法人

# CAP 広島だより



発行：特定非営利活動法人CAP広島 〒738-0011 廿日市市駅前 1-3号  
TEL・FAX 0829-20-5114  
e-mail [cap-hiroshima@viola.ocn.ne.jp](mailto:cap-hiroshima@viola.ocn.ne.jp)  
HP <https://caphiroshima.org>

<目次>

☆私たち CAP 広島の第 1 号動画ができました！（岡本晴美）

☆コロナ禍のこどもたち ～特別支援学校編～（本畝朋子）

☆尾道から応援メッセージが届きました

☆OB メンバーから応援メッセージが届きました

☆中国 5 県 CAP グループ交流会 参加報告

☆会員からコンニチハ

☆ほっと一息のコーナー & 総会報告

☆実績&事務所だより



## 私たち CAP 広島の第 1 号動画ができました！

岡本 晴美

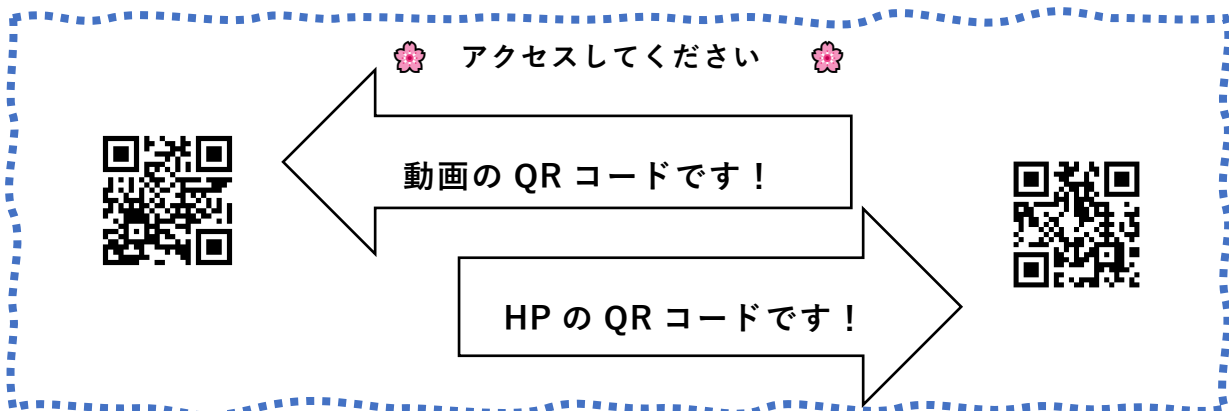


2020 年 12 月に、CAP 広島は設立 25 周年を迎えました。その記念事業の一環として、初の動画作成に着手していることは、以前の会報でもお知らせした通りです。おりしも世の中はコロナ禍に見舞われ、三密を避けるために人々の直接的な接触やコミュニケーションに制限がかかることとなりました。そのことに呼応し、私たちが提供しているワークショップの依頼も自粛モードとなり、悶々とする日々。

コロナ禍だからこそ、CAP の理念を届けたい。コロナの正体がなかなかつかみきれない中では、人権侵害に該当するような事案も世の中では起こりました。医療関係者やその家族、コロナ患者やその家族への心無い誹謗中傷など、コロナに翻弄される中で、傷つき、生きづらさを感じる人々がいることに心を痛める日々でした。

こんなご時世だからこそ、人を大切にするをベースに人とのつながりやかかわりを伝える CAP のワークショップを届けたい、子どもたち大人たちに少しでも元気になってもらいたいと願いつつも、なかなかそれは叶いませんでした。

そのような社会的な背景もあり、CAP 広島の 25 周年記念事業として私たちに何ができるのかをメンバーと考えました。そして、対面で会えないならば、インターネットを通じて、私たちの活動について間接的に伝えようということで、「動画作成」に着手することとなりました。ちょうど、ご縁をいただいていた株式会社 nicopia さんの関係で、IT 専門家である SEAGLASS の川西さんのサポートをいただきながら、また、多くの CAP を応援してくださる皆様のお力添えを得て、第 1 号動画が出来上がりました。公開は、2022 年 5 月 5 日の子どもの日を選びました。今後、第 2 弾も企画中です。多くの皆様にご覧いただき、私たちの活動を知るきっかけにいただければ、また、動画を通して希望を見出していただければ幸いです。



## コロナ禍のこどもたち ～特別支援学校編～

本畝朋子



新型コロナウイルス感染症が拡大し始めて3年目になりました。大人にとっての3年と子どもたちにとっての3年は、同じではないことはみなさん想像したり実感されたりしていることと思います。

3年前の2020年3月、突然の一斉休校が始まりました。その当時、特別支援学校の小学部低学年の担任をしていました。本校はまさに突然の休校だったため、家庭との連携、家庭での過ごし方（宿題づくり）にいきなり追われました。卒業式はなんとか卒業生と卒業担任でのみの実施など、異例のことづくめの混乱した状況でした。

休校によって変わったことの一つに、オンライン学習の普及があります。GIGAスクール構想により一人一台タブレット端末（iPadなど）の整備がされつつあったため、低学年の児童も自宅でタブレット端末を使ってオンラインで顔を見ながら、朝の会をしたり、学習について話をしたりすることができます。高学年になれば、授業をしたり、友だちとおしゃべりしたりすることもできるようになりました。少人数のクラスだからですけど。

現在は、通常の授業を行っています。とはいえ、制約は多くあります。「黙食」給食は、会話せず黙って食べます。「おいしいね」と笑顔になったり、「この食材はね・・・」など食育につながる会話をしたりすることができません。せつかくの給食時間が、しーんとした時間になってしまっているのは、本当に残念です。

「マスクの着用」も、もう当たり前になっています。去年、今年に入学した子どもたちのマスクを外した顔は、給食の時にしか見ることはありません。中には、マスクを着けるのを嫌がる子どももいます。不織布マスクに違和感を感じて嫌がる子。口元にマスクが当



たるのが気になって、マスクをなめてしまって、マスクがすぐにべとべとになる子などがいます。顔を上半分しか見られないので、子どもの表情を読み取ったり、小さな声のつぶやきを拾ったりするのは難しくなってい

ます。大人の私たちが難しいなあと感じているということは、子どもたちはもっと難しいのではないかなと考えられます。

3年前のコロナの感染者数と現在の感染者数を比べたら、比べものにならないくらい多さになっています。でも、できることは確実に増えています。県外の修学旅行も調理実習も卒業式もコロナ前規模でできています。それはコロナへの対応策が知識としてわかってきたからです。

真っ暗なところをいきなり一人で歩けと言われても歩けるはずがありません。でも、杖の使い方や手の使い方（手すりをつかむことや、手を前に出して歩くなど）を知ること、安全に歩くことができるようになります。それと同じように、コロナに対して「正しくおそれる」ことで、できることが増えていくはずです。

私たち大人は、自分の子ども時代と比べて、今の子どもたちが失ったものが多くてかわいそうだと思ってしまいます。しかし、大人が思っているよりは、子どもたちは、今の自分の生活を前向きに楽しんでいます。できない事ばかりに目を向けるのではなく、「今」をしっかりみつめ、「できることをやっていく」「どうやったらできるか」を考えていくことを大切にしていきたいですね。

————— 障害児教育に携わるものとしてのお願い（ほんの一例ですが） —————

○視覚障害者は、レジ前などの足元に貼ってある足形が見えないことが多いです。前の人との距離がわかりづらいです。困っていたら、声をかけてもらえると助かります。

○聴覚障害者は、口元を見て相手の話を理解していることがあります。大きな声を出すよりもマスクを外して口元を見せるか、筆談してもらえると助かります。

○前にも書きましたが、マスクをするのを嫌がってしまう人もいます。

少しでも理解してもらえると、だれもが生きやすい社会になると思っています。ご理解頂けるとありがたいです。

